

安曇野屋敷林 サポーター通信

第16号

発行日/2016年1月12日

編集・発行/屋敷林と歴史的まちなみプロジェクト

連絡先/安曇野ブランド担当 ☎ 0263-71-2053

<http://keikan-azumino.net>

「落葉ひろいボランティア」のご報告

リーダー 場々洋介

平成27年11月18日(土) AM9:00 早朝より16名

梓川の中沢家に集合し、通算 第2回となる、落ち葉ひろいボランティアを行いました。7名のサポーターの方々9名のプロジェクトメンバーが参加しました。中沢直友さんのご説明があり、毎年大変なご苦労で落ち葉の片付けや 屋敷林のメンテナンスの状況を聞くことが出来ました。



中沢さんの説明を聞く



落ち葉の収集



最後に記念写真

「屋敷林フォーラム2016」のご案内

平成28年3月19日(土) 安曇野屋敷林フォーラム2016
を計画しています。昨年11月に武蔵野市を視察し 市の緑に対する政策に感心しました。元武蔵野市長の土屋正忠様を基調講演講師にお招きして開催したいと思います。

緑の存在は公共財産であると移置づけ、全市で25%の緑被率に達成している 理想的な市の実情と苦労話をお聞きできればと思っています。

会場 安曇野市庁舎 4階多目的室

スケジュール 1:30 開会

1:40 基調講演

2:30 パネルディスカッション

4:30 閉会

屋敷林パネル展も企画中



武蔵野市の登録木



仙川緑地

安曇野 屋敷林フォーラム2015

基調報告 野原大輔氏

テーマ「砺波平野の景観は未来への財産か」



私は先ほど紹介にありましたように、基本的には学芸員という、埋蔵文化財を担当している者として、屋敷林は専門外でありまして、今回私がこの仕事を依頼されて自分が一番驚いているのですね。そういった私なのですけども、砺波市は決して屋敷林に関して先進地ではありません。

今日の議題は「砺波平野の景観は未来への財産か」ということでちょっと仰々しいタイトルをつけたのですけれどもこれがあくまでも自分に対する問いかけというか、本当に景観というものは財産なのかなというのを改めて自分なりに考えてみた思考過程を今日お話ししたいなと思っている次第です。

砺波市は富山県の西部の中央部に位置しております。このハート型の形の所が砺波市であります。

有名なのは立山連峰ですね。立山連峰が東側にありますし、あと寒ブリで有名な氷見が北の方にありますし、世界遺産で有名な白川郷五箇山が南の方にある。それこれまでだいたい等距離のような形である、そういった場所が砺波市の位置するところです。

人口はどのくらいかと言いますと、49443人、5万弱ですね。調べましたら安曇野市はだいたい10万位なので、ちょうど半分位の自治体の規模ですね。他の自治体と若干違うのがわずかに微増している、人口がまだちょっとずつ増えているというところです。

砺波市のことについて紹介しておきたいと思います。

砺波市というと有名なのがチューリップであります。

毎年チューリップフェアというのが5月に開かれまして、4月末から5月の連休にかけて、チューリップフェアが1週間あまり行われる。

その時にチューリップ公園という公園の中にこういう100万本のチューリップで、咲き誇ったチューリップでいっぱいになるのですけども、このチューリップフェアに来られるお客様が約30万人ということで、富山県のお祭りで一番多い人数の来場者があります。

あと大門素麺という非常にこしのあるおいしい素麺があります。これが特産になります。

意外に知られていないのが、後でも少し説明しますが種もみであります。種もみが何かと言うと苗を作るための種になるもみです。

その種もみの生産量が非常に多く、全国の種もみの総生産量の3分の1が砺波市で生産されているのです。

全国の3分の1が砺波で作られているということは、ここにいらっしゃる方の3分の1は砺波産の米を食べたことがあるということです。

知らず知らずのうちに砺波産のお米を口にしている可能性がある、ということです。

そういった砺波市、今日テーマにします「散村」であります。

聞いたことある方は「散居村」などと聞いたことある方がいらっしゃるかもしれません、もしませんが、学校の教科書などでは「砺波平野の散村」と聞いたことがあるかもしれません。

ほとんど大部分が扇状地であって、扇状地上に広がっているのが「散村」という風景です。

ではその散村という風景は、これは遠景なのですが、近景、近づいてみたらどうかというこういう感じで、砺波平野の散村の典型的なよく教科書や旅行雑誌に載るような写真ですね。これは5月の田植え前、4月の終わり頃か、どのくらいが分かりませんが、田んぼに水を張った状態ですね。

これは三角の屋根の「アズマダチ」という家屋です。砺波平野ではよく見られる家屋なのですが、非常に大きな家です。

ここで散村とは何かということで、まず簡単に説明したいと思います。

散村、散村といいますが、基本的には集村—「集まる村」と対比されて使われたり、あとは路村—「道路の村」とか、塊村—「塊の村」と対比されて使われることが多い用語です。

砺波平野にしか見られないというわけではなくて、世界的に広く見られる集落形態で、広大な耕地の中に民家が点在する集落形態のことを言います。

日本で散村がどこで見られるかというと、島根県出雲平野とか、香川の讃岐平野、静岡の大井川扇状地、長崎の壱岐、北海道の十勝平野などが有名なところです。

世界で言いますと、イギリス、フランスのナイル川流域、イタリアのポー川流域などで広く見られる形です。

私今日安曇野に入ってきて、安曇野の景色を見ながら来ましたが、安曇野のも扇状地という地形だと思うのですが、屋敷林もありますし似ているなと思った次第です。

ではこの散村というのはなぜできたのかというところを見ていきたいと思います。

富山県というのは先ほど地図で示しましたが、こういう形をしていまして、隣に石川県、加賀藩があったわけですね。

砺波というのは砺波郡というところにありますし、青いところはみんな加賀藩のエリアなのですが、加賀藩の一つの領有地として存在していたわけですね。この砺波郡なのですが、みなさん、加賀百万石というのを聞いたことございますかね。

百万石と言いますが、江戸時代の中でどんどん開発が進んでいくて実際には百万石ではなくて125万石までアップしたんですね。その125万石のうち砺波郡がどれだけ占たかと言いますと、25万石なのです。加賀藩の約20%、砺波郡が生産量を占めていたという現状になります。

砺波平野独特なのですが、この母屋というものは東側を向いているのですね。なぜかと言うと、西南西の風が強くて入り口をこの西南西に持っていくと非常に雨仕舞いが悪いということで、東側に正面を持ってきており、これが砺波平野の特徴です。

東を向いているので「アズマ（東）ダチ」と言います。

周りになぜ屋敷林を植えるのかと言いますと、一つは風を防ぐのです。西南西の風を防ぐために周囲に屋敷林を施す。

あともちろん暑さを和らげたりする効果もあります。

あと大事なのはこれが燃料なのですね。砺波平野というのは扇状地という地形ですので、扇央部に住んでいると山まで結構な距離がある。ということで、薪とか燃料を自分の家の敷地内で供給できるようにするために周りに杉なんかを植えてそのスンバ、葉っぱなんかを燃料にしていたということがあります。

あと各種いろんなものを、栗とか柿とか食べるものを植えてそれを食料にしたり、いろんな役割があります。

あとこの建物を補修したり建築したりするときの建築材にするために植えているというパターンもあります。

ちなみにこの写真は昭和45年の社会科の地理の教科書に載っていた写真でして、現在はここまでは残っていません。現在は先ほど言いましたように、高速道路ができたり、大型ショッピングセンターができたり道路ももっと幅が広くなったりして、第一、圃場整備で水田が大型化されていますので、今は全く違う景色ですけども、この景色が残っていたら間違いなく世界遺産になっていたのではないかというような景色です。

今はこういう景色は残っていないのですが、なんでこういう景色が残っていないかと言うと、そもそも論的なことを言うと、モータリゼーションとか、あとは電気化、機械化そういったもので生活様式がどんどん変わったのですね。

生活様式が変わっていったのと、私が思うのは、人々の美意識が多様化した、価値観が多様化したということも手伝って、それまでは例えば屋敷林を植えることは当たり前とかすごく大事だとか砺波地方には「高は売ってもカニニヨには売るな」という言葉がありまして、高というのは土地のこと、カニニヨというのは屋敷林のことですね。

土地は売っても屋敷林は売るな、そういう教訓があったのですね。そういったことがどんどん価値観の多様化によって崩れ去ってしまって、なおかつ人々の生活様式が変化したことによりまして、散村の持つ本来的な機能が失われてしまった。

ですから、江戸時代のような生活をしていたらそのまま残っていたんでしょうけど、今はそうじゃない。じゃあどうすればいいのかということなのですが、江戸時代に戻るわけにいきませんので、じゃあ現代的の散村のよさもあるはずじゃないかということで、現代的な散村のよさをちょっと考えてみたいと思います。

まず一つは、自然の宝庫。先ほども独立住宅の中に屋敷林がある、水路がある、池があるそういう話をしましたが、それ自体が自然なのですね。

ちなみにこの写真は昭和45年の社会科の地理の教科書に載っていた写真でして、現在はここまでは残っていません。

今は学校にビオトープなんか作ったりしていますが、砺波には平野の中にある学校にビオトープ作ったりするのですが、そんなの必要ないですね。

それぞれの家にある屋敷林の中に行けば自然が残っているのです。

そこに鳥がいて蛙がいてへびがいて、十分そこでひとつの世界観が成り立っているのですね。

なおかつこの自然、要は山に行かなくてもここで森林浴のような効果がある、そういう環境のよさがある。

なおかつ隣の家と散村の中の家というのは点在していますから、隣の家との距離があります。ですからプライバシーも守られる。

なおかつ森林浴になってストレスも解消できる。現代病をここで解消することができるのですね。

そういう自然の宝庫としてのよさが非常にあるのじゃないかなと思います。

あと先ほどお見せしましたアズマダチ、これ入道家住宅という非常に大きなアズマダチなのですが、この家、砺波の人は普通だと思うのですが、よそから来た人はこれお寺ですか?と言いますね。

特に東京の方から来た人は、こんな家がボンボンボンとあります

すから、「ここはお寺がたくさんあるのですか」と言うのですが、「いや、これ家ですよ、普通の人の家です」と言うのですけども、このお宅なんて、部屋数が24個あって、1階のトイレが4箇所くらいあるのです。

その位の家なのです。

その家に住むこと自体が非常に贅沢なことだと思うのですが、砺波の人は割りとそうでもなくて、「こんな家住んでみたいの?」と言うのですが、いやいやそんなことはないと言えると思います。

なぜそう言うかと言いますと、富山県というのは持ち家率が日本一なのです。

持ち家率が日本一で建築面積も日本一なのです。

建築面積の中でも富山県の市町村の中で建築面積が一番大きいのが砺波なのですね。

ということは、砺波の家というのは日本で一番大きい家、その家を持っていること、住んでいることって非常に贅沢なこと。

なぜそう言うかと言うと、砺波の人はこういう家が当たり前と思いすぎていて、簡単に壊してしまうのですね。

でもこの家一棟作るのに、今の金額で言うと1億円くらいかかるのです。

この入道家住宅にしたって三代くらい、100年かけて一軒の家を作るのです。

初代は中心部分、二代目は横の分、三代目は後ろの部分というふうにしてどんどん大きくしていった、100年かけて作った家を簡単に今壊してしまって、なんとかハウスとか、そういった簡単な家を作ってしまう。

そんな現代的な家に住むよりも、こういう家を残しつつ、なおかつ、中をリフォームしたりして住みやすくすれば十分住めるのに、簡単に壊してしまう。

それは悲しいなと思っていまして、毎年砺波平野の中を走っている度にどんどんこういう家がなくなっていく、非常に悲しい思いをしているんですけども、こういうところに住むのは非常に贅沢なのだということを改めて思い出して頂きたいなと思って、私至る所でそういうことを言ったりしています。

なおかつ社会科の教科書に載るように、散村というと砺波だというくらい、砺波らしい景観として価値がある。

ここら辺を大事にしていきたいと思います。

簡単にまとめると、散村の景観は後世に残すべき価値の高いものであると思います。

ここにあります五箇山の合掌造り集落なのですが、五箇山合掌造り集落というのはユネスコの世界遺産になる時に、ニューヨークから、ユネスコの本部から世界遺産の選定委員が五箇山にやってきた。

五箇山にやってきて、五箇山の視察が終わって砺波平野に下りてきたのですね。下りてきたところそのユネスコの委員が「なんだこの景色は」というふうに、砺波平野のこの景色を見て驚いたそうです。

これはすごいなと、五箇山の世界遺産の合掌造り集落にも負けないすごい景色じゃないかと非常に驚かれたと。

ただし砺波平野の市街地の方に入ってきたら、「なんだこれは」と。

それとお水もおいしいのですね。みなさん「いろはす」って飲んだことがあります?この長野県内の「いろはす」って全部砺波の水なのです。富山県砺波市東保が採取地なのですね。

なおかつ340mlの「いろはす」は全国のもの全てが砺波市採水なのです。なぜかと言うと水がいいから。

555mlもしくは北信越地区ブロック、そこで飲まれているコカコーラ社の製品は全て砺波で作られているのですね。砺波工場があるからなのです。ということで全国に出荷されているのですよ。富山、石川、福井、長野ということで、長野県の人も知らず知らずのうちにおいしい砺波の水を飲んでいるのですよ。

ということでご認識頂きたいなと思います。

それだけいい場所だということですね。

まあこれはいいかな…「散村」と「散居村」という言葉があるのですが、どっちが正しいかという。

だから富山湾の宝石「しろえび」ってみなさんご存知です？

これもほんとは「しらえび」なんですよ。「しらえび」って発音しにくいだろうから「しろえび」で売り出そうと富山県府の担当が言い出して、それで「しろえび」になったのです。

でも本当は「しらえび」なんですね。

その「しらえび」を「しろえび」と打ち出した観光課の職員が、うちの前の副市長だったのですね。ですから僕と喧嘩になるわけです。

それはいいとして…。

それと一つの課題として、人口減少の問題があります。

今後どんどん発生していくわけじゃありません。

屋敷林への資源ということで、屋敷林の維持管理には上限1戸あたり20万円とか、屋敷林の育成に関しては年に地区あたり15万円とか、景観保全・創造には1年に15万円とか、そういう補助があります。

あと支援制度。屋敷林だけじゃなくて、家を守るため、空き家をなくすために、支援制度がいろいろあります。

生垣を設置するときには5万円から30万円とか、緑のカーテンを作るときには2万円までとか。生ごみの処理をする施設を作ったらどれだけとか、富山県産の材で家を作った場合は50万円とか、太陽光発電とか、それだけを紹介するだけでもいっぱいあります。

「散りばめられた四季」というDVDを見せるのですね。

これは市外向けの人に対してと、市内向けの人に対して、2バージョン作っていて、なおかつ五カ国語対応ですので、もし興味がある人は「散りばめられた四季」と検索してください。そうするとインターネットでYouTubeというところから見られますので、ぜひご覧になって頂きたいと思います。

あとライフスタイルブックという本を作りました。

首都圏に住む30代の女性の感覚でということで、まさしく首都圏に住んでいた30代の女性の編集者にお願いして、本を作りました。若者向けの本です。

ターゲットは市内もしくは市外在中で、若い人ですね。

風土とともに生きる、古くて新しい暮らし方ということで、「散居村を住み継ぐ編」「料理編」「お祭り編」「水と大地編（農業）」そういうものを順次作っています。

これらは「砺波ライフスタイルブック」で検索するとインターネットで引っかかってきますので、ぜひご覧になって頂きたいと思います。

ここで強調したかったのが、今豊かに暮らしていらっしゃる方、散居村の家屋を楽しんで暮らしていらっしゃる方、そういう事例を、リフォームの事例とか、リフォームせずとも丁寧に住んでおられる事例、そういう家を私50軒くらい回って、その中から厳選してこちらに載せさせてもらっています。

非常にみんないきいきと過ごしていらっしゃるかなと、この冊子では分かります。

これは若い人の家なのですが、ウッドデッキにお風呂を作って、友達が来たらお風呂に入れるようにしてあったりとか、なおかつその家の半分は仕事場、この人建築士さんなのですが、仕事場にして、お祭りなんかがあると人を呼んでウッドデッキでバーベキューをしたり、非常にいいですね。

あとはこういったレストランを作ったり、これは「料理編」ですが、レシピを紹介したり、こんなことをしております。

「よごし」という料理なんかもあります。

こういうのもいいですよ、ということですね。

お祭りも大事で、こういう祭りも景観保全には必要な要素と思いまして、これも大事です。

米作りはもちろん根幹をなすものですから大事です。

それを支える若者たち、農業を志す若者たちも非常に今熱いというで紹介していますし、砺波の根幹である庄川の紹介もしています。

これは「ライフスタイルブック」と検索してもらうと出てきます。あとは農家レストランですね。農家レストランとは、地場産のものを使って地元の人が作ってもてなす、そういうレストランが今流行っています。空き家になっていた家、中島家という非常に立派な家があったのですが、ここの地元に大門素麺というのが名産としてあります。地元の人が「農家レストラン大門」というレストランを作っちゃったのです。今年の3月7日にオープンしました。非常に大流行りで私も今まで3回このお店に行きましたが、3回とも満員で入れませんでした。

そのくらい人気があります。

これどうしたかというと、市の空き家活用補助金を使ったのですね。地元が、1000万円の補助金を活用します、これを元手に住民15人で会社を作ったのです。

それで集落全部がそれに投資したのです。集落と言っても1000人くらいの集落ですよ。

それで空き家をリフォームして、3月にレストランをオープン。ここでは大門素麺と郷土料理を提供しています。

食材は地元で調達しまして、これは地産地消につながります。

という運営に地元が協力しています。

これは今後のモデルケースになると思います。

こういうことをしますと、地域力の向上にもつながると思います。ですから屋敷林とか景観保全とか、そういう鑑賞点ではなくて複眼的に見ることが、今後大事なんじゃないかと思います。

なおかつ先ほどの着地方観光とか、ライフスタイルブック、かもしれませんし、農家レストランなんかの新しい感覚をもっと取り入れてもらわなければなあと思います。

言うなれば、未来を見据えた総力戦なのですね。

あと人口減少社会がもう目前に迫っています。もうなっているかもしれません。

散村の景観は財産にしなければいけない。というのは当たり前で、そのために新しい感覚で持続可能な方法を模索して、地域の総力で取り組むべきでないかと思います。というのは、風景にしろ、風土にしろ、じつとしていてもだめだ、凍結保存というの

はなかなか難しいので、
今の新しい感覚を取り
入れながら住民の努力
でやるべきなんじゃな
いかというのが。

